まなキキ　オンライン購読会

新版 質的研究入門 ＜人間の科学＞のための方法論』, 2011, ウヴェ・フリック著,小田博志監訳, 春秋社

第 13 章-第 14 章

2023年6月13日

担当:H 松

1. 半構造化インタビューへの注目(p180-181)
   - アメリカの質的研究発展史・・・観察法がデータ収集の主要な方法として長く議論される
   - ドイツ語圏・・・オープンなインタビューに関する議論が活発に行われてきた
     →特に、半構造インタビューが関心を集めている。
     理由:インタビュイーの見方がより明らかになるという期待があるから。
     ↓今回は、半構造インタビューの種類をいくつか紹介していく。
2. 焦点インタビュー(p181-188)
   - ロバート・マートン・・・1940 年代に「焦点を合わせたインタビュー(focused interview)」を開発
   - 焦点インタビューの方法
     ①インタビュイーに一様な刺激が示される
     ※提示される刺激は、前もって内容分析される。
     ②それが彼/彼女らに与えた影響がインタビュー・ガイドを用いて調べられる
     →状況の「客観的」事実と、インタビュイーによる主観的な定義とを区別し、互いに比較することが可能になる。
   - インタビュー・ガイドの作成時、インタビューの実施時の基準
     ①非指示
     ②特定性
     ③幅広さ
     ④インタビュイーによって示される深さと個人的文脈
   - 焦点インタビューの構成要素
     ①非指示について
     第一の形式＝非構造化質問　例:「この映画で何が最も印象的でしたか？」
     第二の形式＝半構造化質問　例:「ジョーが精神病者だとして除隊されたシーンを観て、あなたはどう感じましたか？」
     第三の形式＝構造化質問　例:「チェンバレンの演説を聴いたとき、あなたはそれをプロパガンダのようだと感じましたか？」
     ②特定性について
     特定性の基準＝インタビューが一般的な話にとどまることなく、ある出来事の自分への影響や意味と結びついた特定の要素を話しているかどうかということ
     ③幅広さについて
     幅広さの基準が目標にするもの＝インタビューの間に研究設問に関連するすべての側面とトピックとが言及されるようにすること
     ④深さと個人的文脈の基準＝インタビューの中で示されるインタビュイーの感情的反応を「楽しい」とか「不愉快だ」などの単純な評価を越えるようもっていくこと

・　焦点インタビューの問題点
全ての状況に合わないものも含まれていること。
→基準が満たされたインタビューになるかは、実際のインタビュー状況とその経過に大きく左右される。
→インタビュアーはその都度、インタビュー状況に応じた決断・優先順位の変更を行う必要がある。
マートンの指摘：焦点インタビューの際にインタビュアーがとるべき「正しい」行動の明確な定義なるものは存在しない。
↓この問題点を埋めるには・・・？？
- インタビュアーの判断能力を高める必要性
- 実際に身を置いて決断を下す経験を積む＆リハーサルやトレーニングを行う必要性

・　焦点インタビューの取り入れ方
様々な社会グループに固有のものの見方を調べることができる
量的研究のための仮設生成を目的に取り入れる
研究設問の焦点・・・具体的な出来事が当事者に及ぼす影響や、自らの行為の条件を当事者がどう操作するかなどの事例

・　焦点インタビューの限界
マートンとケンドールが研究の力点としたもの・・・一般的脈絡に調査の重点を置くという枠の中で、インタビュイーの主観的見方に関心を向けた。
＝インタビューの主観的見方は、一般的な脈絡を分析するための手段だという考え
→「事例の客観的特徴」ではなく、対象の二次的なバージョンを得る手段になっているという指摘がなされている。

3.　半標準化インタビュー（p188-196）

・　半構造インタビュー（semi-standardized interview）・・・心理学者シェーレとグレーベンが主観的理論を再構成するために開発した特殊なインタビュー形式

・　主観的理論・・・インタビュイーが調査のトピックに関して複雑な「知識の貯え」を有していることを前提にする。
例：がんとは何か、がんにはどのような種類があるか、なぜ人はがんにかかるのか。
→オープンな質問に対して自発的に回答できるような明示的な過程と、言語化するためには補助的方法が必要な暗黙の過程とが含まれる。
→ゆえに、異なったタイプの質問が使用され、それによって主観的理論が再構成される。

・　半標準化インタビューの構成要素
インタビュー・ガイド・・・トピックの領域に従って構成される。
オープンな質問→直面型質問によって締めくくられる。
例）
①「あなたの考えでは、人は進んで互いに信頼し合うものでしょうか？」
→インタビュイーは自分がもっている知識ですぐに答えられる。
②「互いに知らない人の間で信頼は成り立ちますか？それともお互いに知らなければ信頼するのは無理でしょうか？」
→インタビュイーの暗黙の知識を明るみに出すために役立つ。
③インタビュイーが述べてきた理論と関係性と競合するような選択肢を出す
→インタビュイーの主観的理論の中に統合されないようにするため。

- 構造敷設テクニック
  - 初回インタビューから 1,2週間以内に、再びインタビュイーと会うことで適用できるテクニック。
  - 2 回目までに行われていること･･･インタビューの文字化＆大まかな内容分析＆主要な発言内容を概念化したカードの作成
  - 2 回目の対面時に行うこと･･･①カードの提示②SLT の規則を用いて概念を科学的理論に似た形に構造化すること

    ①カードの提示について

    →インタビュイーに初回のインタビューを思い出してもらい、そのときの自分の発言がカード上に正しく記載されているかどうか確かめてもらうため。

    →問題がある場合は、インタビュイーはカード上の記載内容を変更もしくは消去したり、他の発言と差し替えたりすることができる。＝コミュニケーションによる妥当化

    ②SLT の規則を用いて概念を科学的理論に似た形に構造化することについて

    図 13.1（P193）のように、カードを並べ、概念間の因果関係をインタビュイーに作ってもらう。

    その後、インタビュアーが事前に作っていた概念図と照らし合わせる。

    インタビュイーが自分の見方を振り返っていく。
- 半標準化インタビューの問題点

  インタビュイーに手順をどこまで納得してもらえるか

  直面型質問がインタビュイーに引き起こしうる苛立ちをどの程度まで緩和できるか
- 方法論一般への貢献

  色々なタイプの質問を使い分けることで、研究者があらかじめ持っている過程をインタビューの中でそれと分かるように扱えること。

  →どこまでがインタビュイーの見解で、どこからが研究者側の仮定か容易に区別できるようになる。
- 研究プロセスへの組み込み方

  主観的理論の内容や、実際の行動との関連に焦点を当てたものであれば、半標準化インタビューの方法を用いて調査可能な設問となる。
- 半標準化インタビューの限界

  ①研究設問やインタビュイーによっては、質問のタイプや SLT の規則を柔軟に適用する必要があること

  例）患者にインタビューするときには、直面型質問を差し控える必要がある

  ②データ解釈の方法がはっきりしていないこと

4. 問題中心インタビュー（p196-201）
- 問題中心インタビュー･･･ヴァイツェルが提唱。質問とナラティブ刺激とを組み合わせたインタビュー・ガイドを使用することで、特定の問題に関するバイオグラフィー的なデータの収集を可能にする。

  【問題中心インタビューの 3 つの特徴】

  ①問題中心･･･研究者が重要な社会問題に関心を向けること

  ②対象志向･･･調査方法はある調査対象との関連で開発され、修正されなければならないこと

  ③プロセス志向･･･調査のプロセスと対象を理解するプロセスに焦点をあてること
- 構成要素･･･4 つの部分要素がある

  ①質的インタビュー

  ②バイオグラフィー

  ③事例分析

④グループ・ディスカッション

- インタビュー・ガイド・・・インタビュイー自身によって展開される語りの筋を支えるものとなるようデザインされる。会話が行き詰ったときや非生産的な話題に陥ったとき、インタビューに新しい展開をもたらす基礎として用いられる。
- インタビュアー・・・インタビュー・ガイドに基づいて、自分の問題への関心を、指示的な質問の形でいつインタビューに持ち込み、話題を特殊化するかを決めなければならない。
- 方法論一般への貢献

  インタビューと共に簡単な質問表の使用が提案されていること。

  インタビューでの質問の数を減らし、より本質的なトピックにインタビューの時間を割けるようになる。

  ヴァイツェルは、質問表をインタビューの前に用いることを提案したが、インタビュー後に使用することで、質問表の質問―回答のパターンが、インタビュー本番の対話に影響するのを防ぐことができる。

  インタビュー後記の作成も、他の形式のインタビューに応用できる。
- 研究プロセスへの組み込み方

  主観的なものの見方への関心が、この方法の理論的背景にある。

  研究設問の焦点は何らかの事情や社会化プロセスに関する知識などに充てられる。

  この方法のプロセス志向性を実現するために、インタビュイーの選択は徐々に行われる。
- 問題中心インタビューの限界
  - インタビュー・ガイドをどう用い、ナラティブと質問をどう切り替えるかに関するヴァイツェルの考えには、過度な実用主義的な面がある。

    例)「非生産的な話題」に関するナラティブを打ち切って、他の質問を向けるように進めていること
  - グループ・ディスカッションやバイオグラフィー法を問題中心インタビューに含めようとしているが、それらの区分はあいまいで、ひとりの人物としてのインタビューにはなり合えない。
  - 「問題中心」という基準も、留保する必要がある。

    →たいていのインタビューは、何か特定の問題に焦点をあてるものだから。

## 5. 専門家インタビュー(p201-206)

- 専門家インタビュー・・・モイザーとナーゲルが取り組んだ方法。半構造インタビューの特殊な応用形態。

  インタビュイーは一人の人物としてよりも、特定の現場に携わる専門家として扱われる。

  →インタビュイーは、単独の事例としてではなく、特殊な専門グループの代表者として調査される。
- 専門家の定義・・・異なった定義がある。

  自分自身の人生についての「専門家」、病気の「専門家」など。

  ボグナーとメンツ・・・専門家と専門知を明快に定義。専門家は、専門的なプロセスと解釈の仕方に関する知識を有している職業的な活動領域に結びついたもの。
- インタビュー・ガイド

  専門家が担っている仕事の忙しさゆえ、インタビューの時間が制限される。

  専門家インタビューは、原則的にインタビュー・ガイドに従って実施される。
- 目的と形式

  ボグナーとメンツ・・・3 つの選択肢からなるタイポロジーを提案。

  ①新しいフィールドでの方向性を得るという、探索的な調査

  ②体系する目的での専門家インタビュー

  ③理論生成的な専門家インタビュー

・　いかに専門家インタビューを実施するか

インタビュー・ガイドがもつ、強いコントロール機能・・・インタビューの内容を調査で明らかにしたい専門的知識にうまく限定する必要がある。

【失敗パターン】

(1)思っていたほど自分は専門家とはいえないという理由で、インタビュイーがインタビューを打ち切る

(2)専門家がインタビューを進行中の対立に巻き込もうとする。インタビューのトピックについて発言せずに、自分の仕事場の内部事情や確執について喋ってしまう。

(3)インタビュイーが専門家・私人の 2 つの立場を頻繁に取りかえて話、専門家としての知識より、私人としての側面に関する情報に偏った結果になってしまう。

(4)「雄弁型インタビュー」に陥る。専門家が質問―回答のやり取りに加わる代わりに、自分の知識に関する講義を行ってしまう。その講義がインタビューのトピックに合えば有用な情報。しかし、外れて講釈を続ける場合は、本来のトピックに戻りにくくなる。

↓これらを防ぐためのものとしての、インタビュー・ガイド。

✓　調査者が自分を無能な対話相手と思われないようにすることができる

✓　インタビューがわき道にそれてしまうのを防ぐ

✓　専門家が自分の論点や見解を即興で話せるようになる

・　専門家インタビューの使い方

単独の方法としても、組み合わせた方法としても使用できる。

他のインタビューで得た情報を完全なものにする、など。

・　問題点

①「正しい」専門家を特定することの難しさ

施設の中の業務進行を明らかにしたいときに、特にこの問題が出てくる。

②専門家にインタビューに応じてもらうことの難しさ

③時間的制約

④インタビュアー自身に求められる専門的知識の高さ

⑤機密保持

・　方法論一般への貢献

専門家インタビューという応用領域で、半構造インタビューの様々な問題が明るみに出る。

人物としての側面より、特定の職能のほうに、インタビュイーへの関心がおかれる。

専門家インタビューであらわになる問題は、実用的な方向の質的社会調査一般にも共通する方法的問題。

→限られた時間の中で、相手の人物やライフヒストリー全体を考慮に入れず、特定の焦点に的を絞り、さらに方法的にコントロールしながら、いかに主観的な経験を明らかにするのかという問題。

・　研究プロセスへの組み込み方

理論的背景・・・・特殊な側面に関する主観的視点の再構成

インタビュイーの選択は、目的を絞って行う。

データ解釈は、特殊な形のコード化(23 章参照)によって分析し、比較する。

6.　エスノグラフィック・インタビュー(p206-208)

フィールド調査で問題になること・・・そこでの会話をいかにインタビューの形にするかということ

フィールド調査での会話・・・自然発生的に、突然訪れることが多い。

スプラッドリー・・・エスノグラフィック・インタビューには「うちとけた会話」から区別される要素がある。

①研究設問に由来するインタビューをするという明確な目的
②エスノグラフィーの説明として、インタビュー前に説明が行われること
③エスノグラフィー的質問：描写的質問、構造的質問、対照質問

7. インタビューの実施：仲介と舵取りの問題（p208-212）

- 半構造インタビューに共通していること＝オープンな質問をインタビュー・ガイドの形にまとめて、それを用いてインタビューを行うこと。
- ウルリヒ（1999）の提案、ガイドの構成と質問項目の立て方を点検するのに役立つ
- 半構造インタビューの課題：インタビュー・ガイドや研究設問の目的と、インタビュイーの表現の仕方とをどう仲介するのかという問題。
  →インタビュアーは、どの順番でどの質問を向けるか、流れの中で決めることができるし、決めなければならない。
  →細かい事情を掘り下げるか、本題から外れて話を膨らませることをみとめるか、いつそうするのか、という問題にもインタビュアーは直面する。
  →インタビュー中にすでに言われたことを把握し、研究設問と関連しているかどうかを把握する力も求められる。
  ⇒インタビュアーは、インタビューの進行とガイドとの間でつねに仲介する必要があるといえる。
- ホッブフ・・・インタビュー・ガイドを「官僚主義的に」杓子定規なやり方で用いることを容認。
  →インタビュアーがガイドの質的項目や順番にこだわりすぎると、半構造インタビューの長所である開放性や文脈情報の獲得が犠牲になるから。
- なぜ、ガイドを優先してしまうのか？
  ①インタビュー・ガイドが持つ、保護的な役割
  →不確かさに対処しようとして、インタビュアーがガイドに頼ってしまう。
  ②インタビュアーの不安
  →ある質問項目を飛ばしてしまうと、研究目的から外れるのではないかという思いで、インタビュー・ガイドを杓子定規的に適用してしまう。
  ③インタビュイーの時間的圧迫
  ↓このような問題を防ぐには・・・？
- ロールプレイ
  模擬インタビューを行って、練習する。
- ヘルマンスの提言
  ①相手には、早めに会話の枠組みを明らかにすべし
  ②インタビュー中、よい雰囲気をつくるべし
  ③相手が自分を語れるような余白をつくるべし
  ④「ドラマ」が展開できる可能性を与えるべし
  ⑤インタビューでは、理論的概念を見つけようとするべからず。会話の相手が生きる世界を発見するよう努めるべし。
  録音機材の扱い・・・・自然に意識しないように扱うことが大切
  フリックの考え：⑤が最重要。研究設問はインタビューの質問とは違うということを認識し、インタビューでは専門用語ではなく、日常の言葉を使うよう努めるべき。

8. データとしてのナラティブ（p215-216）

- ナラティブとは・・・
  まずはじめの状況が述べられる(「すべてがどう始まったのか」)。次に経験全体の中からそのナラティブに関連する出来事が選ばれ、ある一貫した展開の中でそれらの出来事が語られていく(「ものごとがどう展開していったのか」)。そしてその展開の結末で締めくくられる(「それでどうなったのか」)。

9. ナラティブ・インタビュー(p216-227)

- ナラティブ・インタビュー・・・主にバイオグラフィー研究の文脈で使われる方法。
  地域社会の権力構造と決定プロセスに関する研究プロジェクトの中で開発された方法。
  データ収集の基本原則
  ナラティブ・インタビューの中でインフォーマントに求められるのは、自分が関わった対象領域の歴史/物語を即興的に語ることである。・・・・このときのインタビュアーの役割は、関連するすべての出来事が最初から最後まで一貫したストーリーとなるようにインフォーマントに語ってもらうことである。
- ナラティブ・インタビューの構成要素
  始まり方・・・「ナラティブ生成質問」をインフォーマントに向けることで始まる。
  追加質問・・・ナラティブ生成質問を受けての語りで、十分に語られなかった事柄が、追加質問される。
  終わり方・・・総括をする。インタビュイーは、出来事に理論的な説明を加え、ストーリー全体の意味の要約となるような共通点を導き出すよう求められる。=「自分自身の専門家かつ理論家」とみなされる。
  ナラティブ生成質問の例(p217)
  あなたが人生をどう歩んでこられたのか、お話下さい・・・・細かいことにも、時間をかけてお話ください。(Hermanns 1991:182)
- ナラティブ・インタビューの注意点
  - 生成質問後、口をさしはさんで妨げることは、原則的にしてはならない。
  - 聞き手として、共感し、理解しようとしているというシグナルを出す必要がある。
  - 語り手が最後まで話し続けることを支え、励ます。
- どこまで口を挟まずに聞くのか
  語りの終わり・・語り手による締めくくりの合図を待つ。
  例)「だいたいこんなところです。こんな話が役に立つといいのですが」(Hermanns 1995: 184)
  ↓その合図があってから・・・
  別のナラティブ生成質問を向ける
  - ✓ どのように(how)から、どうして(why)へ。
- ナラティブ・インタビューの情報の妥当性
  インタビュイーの話がナラティブであるかどうか。
  →インタビュイーが述べたことは、部分的には状況やルーティーンの描写や理由づけが含まれていても、全体をみると出来事の経過や展開に関するナラティブの形式である必要がある。
- インタビューの問題点
  ①インタビューの関係者双方が想定する役割に、系統的な混乱が生じること。
  語り手:問われる質問が、普通のインタビューと違っているため、混乱。
  聞き手:語りの自由度が、日常ではめったに経験されるものではなく、混乱。
  ②何かを語れるという能力の程度に差があること
  誰しもが、自分の人生を語ることに長けているわけではない。
  ↓対処する方法は・・・

インタビュートレーニング（積極的に聞く訓練）

- 方法論一般への貢献

  質的インタビューは、インタビュイーの経験の仕方と構造と形態を、そのままに捉えられるだけの自由度をもつべき。

  半構造インタビューのジレンマに対するモデルを提示していること。

  ①インタビュイーは必要なら数時間にわたって自分の話をしてよいし、また、そうしてほしいという方向づけがインタビューの最初に与えられる。

  ②構造化とテーマの掘り下げを目的とした、インタビューへの具体的な介入は、インタビューの終わりになってはじめて行なわれる。

  ③ナラティブ生成質問はたんにナラティブの産出を促すだけでなく、そのナラティブを特定のテーマ領域や、特定のバイオグラフィーの時期に焦点を絞る役割をする。

- 研究プロセスへの組み込み方

  理論的背景は、インタビュイーの主観的な見方と実践の仕方の分析。

  研究設問の焦点は、バイオグラフィー的なプロセスを具体的な文脈やより一般的な文脈の分析に充てられる。

- ナラティブ・インタビューの限界

  ナラティブ＝事実と仮定することができないこと。

  人生の細部を聞き出すことが、研究倫理に接触する可能性が出てくること。

  トランスクリプトの量が膨大になること。

10. エピソード・インタビュー（p227-234）

- エピソード・インタビュー・・・特定の領域に関する主観的経験はナラティブ・エピソード的知、ならびに意味論的な知の形で貯えらえれ、かつ想起されるとの前提から出発。
  - ➢ エピソード的な知・・・経験に近い。具体的文脈における状況の経過が中心単位。
  - ➢ 意味論的な知・・・抽象化され、一般化された仮定や関係性を含むもの。諸概念とそれらの関係性とが主要単位。

    →両方の形式の知をとらえるために考え出されたのが、エピソード・インタビューの方法。

- エピソード・インタビューと、ナラティブ・インタビューの違い

  エピソード・インタビューは、インタビュイーに語ることが求められるが、結末まで意に反して語り続けるというプレッシャーがかけられることはない。

- 構成要素

  重要な点・・・状況について語ってもらうよう適宜促すこと

  例）思い返してみてください。あなたがテレビと最初に接したときのことを。それがどんな状況だったか、お話下さい。

- エピソード・インタビューの問題点

  物語ることが不得手な人がいること

  物語るという原則をインタビュイーに十分理解してもらう必要性

  →ただ言及するだけで終わってしまうケースもあり得るから

- 方法論一般への貢献

  エピソード・インタビュー・・・ナラティブ・インタビューと半構造インタビューの両方の長所を生かそうとする方法

エピソードによって、人生全体に関するナラティブよりも具体的に研究対象に関連したインタビュイーの経験にアプローチ可能になる。
日常的な現象も分析可能になる。

- 研究プロセスへの組み込み方
  ナラティブと一連の問答とを組み合わせた、トライアンギュレーションがデータ収集の基礎になる。
- エピソード・インタビューの限界
  特定の対象やテーマに関する日常知とストーリーという適用領域の制限
  具体的状況における行為や相互行為を明らかにするものではない

11. バイオグラフィーとエピソード間のナラティブ（p234-235）

インタビュアーの存在・・・ナラティブ・インタビューだからといって、0 ではない。方向づけや構造化はなされる。
単独の方法を盲信することの危うさ・・・ナラティブ・インタビューをめぐる議論で、単独の方法がどんな方法よりも優れているという主張がなされることがある。どのインタビュー方法にするか決定するとき、そのような考え方をするべきではない。
エピソード・インタビュー・・・ナラティブの物神崇拝といえるような硬直した立場とは別の方向を示すもの。
※ある家族の歴史を家族メンバー間の対話から明らかにするという道もあるが、それは次章で扱う。

12. H 松の疑問

- ✓ 半標準化インタビューのうち、構造敷設テクニックについて
  インタビュイーにインタビュー結果から得られた概念カードを見せ、問題がある場合は、インタビュイーにカード上の記載内容を変更もしくは消去したり、他の発言と差し替えたりしてもらうことで、コミュニケーションによる妥当化をはかる手法は、心理学の分野だから有用なのだろうか。インタビュー結果の解釈を見せることで、「それは論文に書いてほしくない！」など言われてしまい、事実が書けなくなるというジレンマはないのだろうか。